



読書会をしよう！

守山市立図書館所蔵の読書会テキストの中から
5冊をピックアップしてご紹介します



『52 ヘルツのクジラたち』 町田 そのこ／著 中央公論新社 913.67



他のクジラに声が届かない“52ヘルツのクジラ”を象徴に、虐待や孤立といった痛みを抱える人々の声なき声に耳を傾ける物語です。虐待を受けてきた主人公が、母親に虐待されて言葉を失った少年と出会い、互いの痛みを理解し合おうとする過程が描かれています。他者に寄り添うことや助け合うことの難しさが繊細に表現され、優しさと切なさを感じられる1冊です。

★「読書好き集まれ!感想語り読書会 第2回」2/23(月祝)開催のテーマ図書です。

『身がわり』 有吉 玉青／著 新潮社 910.27

本書には、母・有吉佐和子のエピソードや母との思い出が綴られています。我が道を行く母は、子育てにおいても時々突拍子もないことを思いつきますが、そこにはいつも娘を思う母のあふれんばかりの愛がありました。

母は、著者が20歳の時に病気で急逝しました。子どもの頃は、作家の子と周囲から言われ、重荷になり母に反抗したこともありましたが、本当は母のことが大好きで、誇りに思っていました。共に過ごした時間は短かったかもしれませんが、2人が深い愛情、信頼で結ばれていたことが伝わってきます。



『バッタを倒しにアフリカへ』 前野 ウルド浩太郎／著 光文社 486.47



バッタに食べられたい(!)と願うほどにバッタを愛するバッタ博士が、バッタで食べていくためにアフリカのモーリタニアに単身乗り込み、バッタその他と死闘を繰り広げた日々を綴った1冊です。バッタ好きが書いたバッタの本として、モーリタニア滞在記として、ポスドクの就活奮闘記として、様々な楽しみ方ができる本ですが、とにかく面白い本が読みたいという方にもおすすめ。続編に『バッタを倒すぜアフリカで』もあります。

『ビタミンF』 重松 清／著 新潮社 913.65

本著は7つの短編小説からなる第124回(2000年)直木賞受賞作です。人生の中間地点に差し掛かった年代の男性たちが主人公。社会や家庭、仕事における葛藤に苦悩しながらも、前向きに日々を過ごす主人公たちが描かれています。著者の後記にもあるように、Family、Father、Friend、Fightなど、Fから始まる言葉を個々の作品のキーワードとし、心に効く「ビタミンF」がそれぞれの物語に込められています。



『光のどこにいてね』 一穂 ミチ／著 文藝春秋 913.61



古い団地の片隅で偶然出会った2人の少女・結珠と果遠。「互いが互いのお守りだった」という程の絆を育むものの、親の都合で2度の別れを余儀なくされます。それから数年後、すっかり大人になり結婚もした2人は、思いがけず遠い地で再会しますが、どこか別れの予感がつきまといまいます。友情とも恋情ともつかぬ心の機微が繊細に描かれ、甘くもほろ苦い味わいが魅力の物語です。